

■いわて文化ノート

絵師川口月嶺のこと

主任専門学芸員 齋藤里香（歴史・古美術部門）

■生い立ち

川口月嶺（かわぐち・げつれい 1811～1871）は、江戸時代後期の盛岡藩を代表する絵師の一人です。文化8年(1811)、陸中国鹿角郡花輪村(現秋田県鹿角市、旧盛岡藩領)で翹屋を営む家に生まれました。幼いころから絵を描くことが好きだった月嶺は、それ以外のことには熱心でなく、18歳の頃、ついに画業を志して故郷をあとにしたと伝えられます。

■鈴木南嶺に入門

秋田から山形を遊歴して江戸に出た月嶺は、円山四条派の絵師・鈴木南嶺(1775～1844)に入門し、画技を磨きます。月嶺の画号は師の南嶺から与えられたものです。同門に後に漆芸家としても名を成す柴田是眞(1807～1891)がいました。

岩手県立博物館では、月嶺の日々の研鑽の様子をうかがうことができる写生帳や模写絵、絵手本、下絵などを所蔵し

ています。多くは月嶺の子孫宅に伝えられた資料を寄贈していただいたものです。中には天保の年号が記された資料もあり、修業の一端を知ることができます。

■盛岡藩に出仕

弘化2年(1845)、月嶺は十数年ぶりに故郷の花輪に戻ります。35歳の時でした。月嶺の名声は瞬く間に広まり、やがて盛岡藩主・南部利済(1797～1855)の知るところとなります。盛岡藩に召し抱えられたのは、翌年2月のことです。

盛岡藩家老席の日誌『覚書』(もりおか歴史文化館蔵) 弘化3年(1846)2月2日条には月嶺こと川口七之助について「御遣方有之、式人扶持被下置被 召出、御代官召連罷出、於柳之間老中列座、帯刀申渡之〔御遣方あり、二人扶持下し置かれ召し出さる。御代官召し連れ罷り出、柳之間に於いて老中列座、(橋山) 帯刀申し渡す。〕」とあります。絵師としての力

量を見込まれ、二人扶持で召し出されたのです。10月には「奥詰」を仰せつかっています。

ちなみに、盛岡藩にはお抱えの「御絵師」がいますが、「奥詰」の肩書をもつた月嶺(川口七之助)は、彼らとは別扱いということになります。

■盛岡城の障壁画を描く

南部利済は、普請好きだったことで知られています。現在の岩手県議会と岩手県庁があるあたりに広小路御殿、中央通をはさんで西の方に清水御殿、盛岡城大奥に三階建ての御殿を造営しました。御殿が建てば襖絵をはじめとして壁画や板戸などが必要となり、絵師は大忙しです。

大奥の普請工事が盛んに行われていた嘉永4年(1851)に月嶺が仕事の内容を控えた業務日誌が紹介されています。それによると、障壁画の他にも屏風や衝立、掛軸、羽子板など、いろいろな御用を仰せつかっています。(小原茂『月嶺筆『年中御用控』 岩手の古文書第7号、1993年3月、岩手古文書学会)

『年中御用控』からは精力的に仕事をこなす月嶺の姿がいかにも見えます。途中、あまりの忙しさに記す時間が無かったようで、日にちが飛んでいるところが随分あります。絵を描くことが主な仕事ですから、現代のサラリーマンのように定時出勤、定時退社ということはなく、家で仕事をしている日もあり、城からの呼び出して登城する日もあり、藩の公式行事に参列している日もあります。登城と下城の時刻もまちまちで、五時半時(午前9時頃)に登城している日もあれば、六つ時(午後6時頃)に登城して帰りが夜八つ(午前2時)という日もあります。

帰りが遅い日はお酒やお膳を頂戴し、仕事のご褒美に利済から御召物を拝領した記録もみられます。



月嶺の写生などの綴り(岩手県立博物館蔵)



盛岡城大奥の襖の下絵と伝えられる「雅楽観覧の図」(岩手県立博物館蔵)

岩手県立博物館では、大奥の襖の下絵と伝えられる「雅楽観覧の図」を所蔵しています。具体的にどこの部屋の襖なのかは特定できていませんが、盛岡城の間取りを見ながらあれこれ想像するのも楽しいものです。そのほかにも「御居間方四枚」と付箋のついた襖の下絵や、「竹之御間」と注記のある小襖の下絵などがあります。

月嶺は大奥普請工事が終了した嘉永4年(1851)12月、かねがね御絵御用に精を出してつとめ、かつ、この度の大奥御普請に尽力した功績によって三人扶持を加増され、五人扶持となりました。

安政2年(1855)4月に南部利済が亡くなると、盛岡藩の御小納戸支配絵師・藤田祐昌が尊像の制作をすることになりますが、月嶺にはその差し図をするようにとの下命がありました。これは結局沙汰やみとなりますが、月嶺が利済の側近くに仕えたことによる下命であったと考えられます。

■東海道の旅

慶応元年(1865)閏5月、時の藩主・南部利剛(1826～1896)の参勤のお供を

して月嶺は江戸に上りました。二十歳になる子の亀次郎(号：月村)も一緒でした。利剛は「御痛所」があつて領内の温泉で療養するため8月29日に江戸を発つて盛岡に帰って来ますが、月嶺はその一行には加わず、東海道を西へ向かったようです。

翌慶応2年(1866)6月、月嶺こと川口七之助は「京都大坂御用向き出精相勤め候に付」金500疋を拝領しています。この時の肩書は「大奥御用間格御用中御銅山吟味役加」となっています。御用向きの中味は分かりませんが、東海道の写生帳や京都の寺社を描いた作品などが伝えられており、この旅の成果とみられます。

ところで月嶺と共に江戸に上った亀次郎はというと、やはり京都にいました。しかし、お役目は京都御所の警備。慶応元年の冬から翌年4月にかけて、盛岡藩は幕府から「京都御守衛」を命じられ、京都御所の「日之御門前」の警備にあたりました。6月に任務に就いた人々に恩賞が下されているのですが、その中に「七之助嫡子 川口亀次郎」の名があり、「京都御守衛御用出精相勤め候に付」金200

疋を拝領しています。

亀次郎(月村)は月嶺のもとで絵を学んでいましたが、「関流算術」の稽古もしていたことがわかっています。慶応元年3月には藩から「大砲方手伝」を命じられていました。絵筆一本とはいかない幕末の緊迫した世相が感じられます。

■晩年

慶応3年(1867)3月、月嶺は鉛温泉に湯治に行く藩主・南部利剛のお供を仰せつかります。利済のみでなく利剛の信も得ていたらしく、月嶺の別号「真象」は、利剛から贈られたものと伝えられています。

幕末維新の動乱を経て、月嶺は明治2年(1869)10月17日、七之助を改め直七の名を拝領。没したのは明治4年(1871)7月22日のことでした。享年61。

川口月嶺は盛岡藩主の評価を得、藩士の中にも門弟を擁したため、それまで狩野派が主流であった藩内に円山四条派の画風が広まったといわれます。作品の調査と併せて藩の記録類や周辺の人物の調査を進め、月嶺の仕事と人物像をより鮮明にしていきたいと考えています。